

ラオスの こども通信



75号
2019年10月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- ALC図書館の魅力度アップを目指して ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「変」 ▶ p.4



*写真の説明はp4をご覧ください。

ALC図書館の魅力度アップを目指して

「ラオスのこども (Action with Lao Children: ALC)」のラオス事務所併設の ALC 図書館。平日の昼休みは近くの小・中学生で賑わい、学校が休みの土曜日は近所の子どもたちがやってきます。このところ土曜の来館者数が落ち込み、図書館の再活性化が課題に挙がっていました。(渡邊淳子/ラオス事務所駐在)

伝統お菓子づくりイベント



ココナッツ&サトウキビ館のお餅をバナナの葉で包んで…みんな真剣!

ラオス事務所のスタッフが、魅力ある図書館づくりを目指して、1年に1つ新規イベントを開拓することにしました。今回企画したのが、ラオスの伝統お菓子づくりのイベント。ちょうど、お坊さんが修行に入る7月中旬の行事「カオーパンサー(入安居)」にあわせて、お寺にお供えをするちまき菓子「カノムティアン」と事務所の庭で採れるマンゴーを使った「マンゴージャム」を子どもたちと一緒に作ることに。昔は多くの家庭でも作られていたこれらのお菓子も、最近は買ってすませる家も多くなってきています。

参加した中学生のパッパオーさんは、「今までちまきは近所のおばさんが作ったのをもらっていたから、自分で作るのは初め

で。どんなふうで作るのか分かってよかった」一緒にいた小学生のオーちゃんは、「自分で作ったちまきは美味しかった。帰って家族のみんなにもあげたよ」と話してくれました。

今回のイベントでは子どもたちだけでなく3人のお母さんも一緒に参加。スタッフのチャンシーに「マンゴージャム」やそれを乾燥させて作る「のしマンゴー」の詳しい作り方を尋ねている光景もみられ、親子ともに楽しめるイベントになりました。

絵本から広がる活動

子どもたちがイベントを通じてラオスの食文化に触れられるよう、お菓子づくりの合間のアクティビティにも工夫を凝らしました。

創作ゲーム「バナナゲーム」では、初めにバナナの物語絵本をみんなで輪読して、そのあとグループに分かれて、読んだ絵本を参考にしながら、バナナの使いみちを答えて競います。

ラオスではバナナを、カノムティアンのように葉で食材を包んだり、お皿にしたり、花は刻んでおかずに入れて食べたり、茎はブタの飼料にするなど余すところなく使う文化があります。



グループでバナナゲーム。「もう答えはない?」との問いかけに、子どもたちは「待ってえまだあるもん!」と粘って、全部で40以上出ました。

イベントのなかで、ゲームが一番楽しかったというやんちゃ坊主のジミー、ポビー、ムンミーたちは、「ゲームで、みんなと一所懸命考えて答えを出すのが面白かった!」「バナナの色んな使いかたが、どんどん出てきてワクワクした」「バナナが紙の材料になるなんて知らなかった～」と口々に答えてくれました。こんなふうにお菓子づくりの活動と、絵本とゲームを組み合わせて、ラオスならではの食文化や暮らしの知恵を知り、子どもたちが自分たちの国や地域の文化・習慣の意味合いを知り、その豊かさに誇りと愛着を持ってもらえたらと願っています。

ラオス事務所では、9月からインターンやボランティアを迎えます。ラオス人のスタッフと協力して、絵本や読書活動を発展させた、さらに魅力あるアクティビティを考案・展開していきたいです。

もっと利用したくなる図書館に

ALC図書館の魅力度アップのために、今年度はもうひとつ新たな取り組みを予定しています。それは、ラオス事務所スタッフの人材育成を図る実務研修です。

10月に図書館学の専門家、下田尊久さんを迎え、図書の並べ方を考えたり、テーマを決めて本の紹介展示をする研修を計画中です。本の配架や展示はとても大切で、ちょっとした工夫で子どもたちの興味がわき、来館者や本の貸し出しが増える可能性を秘めています。スタッフが実際に自分たちで考えて、よりよい配架や展示を実践してみることで、その重要性や奥深さに気づき、ALC図書館を改善していくことがねらいです。



お休みに ALC 図書館に来た中学生の仲よし3人組

こうしてラオス事務所のスタッフが ALC 図書館で実践していくなかで身につけた知識やノウハウは、ラオス全国に当会が支援する300か所以上の学校図書室や地域文庫のフォローアップで活かされます。スタッフは、今まで学校図書室のオープンやフォローアップ時に、先生や生徒、地域の人々に向けて、本が子どもたちの成長に大きな役割を果たすこととともに、図書の扱い方や図書室・図書館の運営方法について助言しています。その内容をより充実させ、スタッフが自分たちの経験をもとに、自分たちの言葉で、図書や図書館の有効な活用方法について具体的な指導やアドバイスが出来るようになっていくことでしょう。このようにラオス全土の学校図書館の向上のためにも、ALC 図書館はスタッフが日々実地で改善し、子どもたちの反応などを感じとり、試みを重ねていく大切な場所なのです。

ここの図書館に来ると、いつも新しい発見・出会いがある—そんなふう子どもたちと地域の人に思ってもらえるように、毎日訪れたい魅力ある ALC 図書館づくりを目指していきます。

ポンサイ中学校 VEDC 研修



建設中の図書館を視察。事務局長の野口からの説明に完成後のイメージが膨らみます。

ヴィエンチャン県の2郡の中学校3校で図書館を建設し、郡の教育局、村の教育開発委員会 (VEDC)、ラオスのこどもで連携して中学校図書館を支援するプロジェクトの速報です。

8月8、9日、建設中のポンサイ中学校図書館の運営をサポートする「村教育開発委員会 (VEDC)」のメンバーに向けた研修を開催しました。

ラオス事務所では事前に研修講師となる郡教育局と打合せを行い、VEDC の役割や学校図書館の意義について講義資料をまとめ、ワークショップを検討するなど念入りな準備をしてきました。その甲斐あって、当日は VEDC メンバー9人全員が参加し、講義では積極的に質問し、ワークショップでも様々なアイデアが出るなど自分たちの図書館として捉えている姿がみえました。

ポンサイ中学図書館の建設は9月末に完了し、10月は学校の先生・生徒向けの図書館研修を実施します。当会では、VEDC も含めた図書館研修の指導とともに、今後は、VEDC が8月の研修で考えた図書館運営支援のアイデアを実際の学校計画に落とし込み実施していくことをサポートしていきます。

(外務省日本 NGO 連携無償資金協力「ビエンチャン県における中学校の図書館整備を通じた読書推進活動」事業)



理想のポンサイ中学校図書館を実現させるために、村教育開発委員会がどのようなサポートをしていくべきか、アイデアを出し合いました。

学習院女子大学の事務所訪問

9月12日、学習院女子大学22人の皆さんがラオス事務所を訪問。国際コミュニケーション学科の伊藤先生が毎年実施しているラオスでの国際協力研修の一環です。

ラオス事務所駐在の渡邊スタッフの活動紹介では、「ラオスの教育事情について教えてください」「NGOで行う活動と政府が行う国際協力と違いはありますか?」といったたくさんの質問があり、皆さんの関心の高さがうかがえました。

学習院女子大学は10年にわたり、出版事業を支援いただき、これまでに出版した絵本は16種類4万冊以上に及びます。今年も、日本の昔話「ふるやのもり」によく似たお話の絵本『トーホア(雨もり)』の再版で、出来立てホヤホヤを皆さんに手渡すことができました。出版支援した絵本を、子どもたちに読み聞かせするなどの活動にも活用されてきました。ラオスの子ども達の読書支援をこれからも一緒に続けていけることを当会は願っています。



ラオスでの本の出版についてスタッフから話を聴く学生たち

ラオス語絵本を作ってラオスの子どもたちに送ろう!



リピーターから初参加の方まで、和気あいあいと絵本を作りました。

7月6日、沖電気工業株式会社本社で、第20回「ラオス語絵本を作ってラオスの子どもたちに送ろう!」を開催しました。土曜日を利用して、社員や家族のみなさん25人が参加。日本語の絵本にラオス語翻訳シートを貼って、合計60冊の絵本を完成させました。出来上がった「ラオス語絵本」は、ラオスの学校図書室などに届けられます。

絵本作りの前に「不発弾と子ども」について東京事務所の伊藤スタッフが講演しました。今なお残る負の遺産である不発弾は、現在もラオスの人々に大きな被害をもたらしています。被害者の多くは、何も知らない子どもたち。さらには、その汚染地域と教育を受けられない子どもたちがいる貧困地域は共通しており、不発弾の存在は、教育環境が整わない為に子どもたちが学ぶ機会を失っている原因の一つといっても過言ではありません。不発弾問題と、子どもたちとの関係について説明をしました。

当会は、ラオス語翻訳を貼ってラオスに送る「ラオス語絵本プロジェクト」への参加を呼びかけています。個人やグループのほか、講演とセットにして学校や企業で実施するプランも用意しています。日本で身近にできる国際協力に、ご参加ください。



一冊一冊に思いを込めて、丁寧に

ラオスで大人気! 『おおきなかぶ』



noonニアン小学校での劇のようす。お面はスタッフのお手製です。(当会ホームページのスタッフブログで動画をご覧になれます)

『おおきなかぶ』って、ラオスでこんなに人気!ラオス事務所に駐在して初めて知った、その人気の高さ。

このお話が面白いのは、みんなが一緒に参加できること。「読み聞かせや劇をするときは、カブを引っ張るイヌやネコを、1匹だけじゃなくて何匹も増やして行って、クラス中で長〜い列をついたり、動物のところを友達の名前に変えて、「〇〇ちゃん、カブを抜くの手伝ってえ〜」と呼びかけたりすることも。そのときそのときで色んなバージョンの『おおきなかぶ』を楽しむことができるのよ」。スラビー事務所長が教えてくれました。

まごがおばあさんをひっぱって…おばあさんがおじいさんをひっぱって…おじいさんがひっぱるのは?…“フウパカット!(カブ)”と子どもたちの元気な声が教室中に響き渡ります。ラオスで愛されている『おおきなかぶ』が、この度のラオス語出版で、一人でも多くの子どもたちの元に届くことを願っています。(渡邊淳子)

「ラオスのこども」の仲間たち

新しい出会いと知識が、原動力

スパン パンティラート/ラオス事務所2014年 入職

担当している仕事は、出版事業と図書館活動。ニックネームは「パン」ですが、本名の「スパン」は、日本語の「出版(しゅっぱん)」の発音に似てるとでしょ!と、無邪気に笑ってみせてくれました。出版の仕事の魅力は、たくさんの方の意見を聞く機会があること。「出版には、一つ一つのステップがあって、そのステップごとにいろんな人の意見を聞くことになる、自分にも知識が増えるので楽しい」といいます。今後担当する絵本は、福音館書店出版『おおきなかぶ』のラオス語版。この本について聞くと、彼女自身もこの本を子どもたちと一緒に読むことが楽しくて大好きだそうです。「積極性のある元気な子、恥ずかしがり屋な子、いたずらっ子など、いろんな性格の子どもがいるけれど、この本を読むときはみんな一つになれる。そんな経験を子どもたちには、たくさんしてほしい。出版されてさらにこの本に触れる機会が増えたら、子どもたちもとても喜ぶと思います。」と語ってくれました。



次は『おおきなかぶ』の出版

ラオス中南部のカムアン県で生まれ、首都ヴィエンチャンにあるラオス国立大学で生物学を専攻。卒業後は政府機関で働くことが決まっていたのですが、そこでいったい自分はどれくらい成長できるのだろうか、悩んでいたそうです。すると、大学時代の同期で、現在は同僚のスパイさんから、「ラオスのこども」のことを聞き、人と関わる機会がたくさんある仕事に魅力を感じて就職したとのこと。子どもたちと同じ目線に立って接する姿と、仕事への熱い想いを持つパンさん。今後の目標は、ラオスの伝統や文化を伝える本を出版すること。「出版のことや図書館活動のこと、まだまだたくさんの勉強が必要で、子どもたちのために自分も成長をしていきたい。」と、きらきらとした表情で熱く語ってくれました。

表紙の写真

7月15日に開催された「ラオスの伝統お菓子づくり」イベントでの1コマ。子どもたちが手にしているのは、絵本『ほくはどこへ行くの』。バナナとビニール袋が友達になって一緒に旅をしながら両者の環境衛生の違いを知る物語。さあ今から、作戦タイム!絵本で得た知識、暮らしのなかの記憶をフル稼働させて、ありったけのバナナの使いみちをひねり出そう~

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 75号

2019年10月発行 編集人:森透
発行:Action with Lao Children / DeknoyLao
(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: alctk@deknoylao.net
http://deknoylao.net
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

<2019年度通常総会実施報告>

特定非営利活動法人ラオスのこどもの2019年度通常総会を9月14日、ライフコミュニティ西馬込で開催し、活動会員33人(書面表決者16人、委任状4人を含む)と活動協力者6人の合計39人が出席しました。2018年度の事業報告案・決算報告案、理事の承認・監事の選任に関する事項が承認され、2019年度の事業計画書、第8次中期計画が報告されました。第2部は「皆で考える『学ぶとは?』」をテーマに日本の夜間中学のドキュメンタリー映画「こんばんはII」を観て意見交換会し、日本やラオスで「学ぶ」機会を失った人々の存在、「学ぶ」ことの意義な支援のあり方などを語り合いました。



メコンのほとり変

ヴィエンチャンの今

2年ぶりに戻ったヴィエンチャンは、急激な変化を遂げていました。ダイソーが新たに新店(こちらでは、100円ショップならぬ18,000キープショップ)、有名ブランドの店舗もちらほら見かけられるようになり、バス路線は拡張し屋根付きのバス停が整備され、空港までアクセスが容易に。ここは本当にラオスなのか?ラオスじゃないみたい!と思うこともしばしば。それぐらい首都は以前に増して発展していくスピードの速さを感じます。

便利になった一方で、道端の人とおしゃべりするようラオス独特の、のんびり・ゆったりとした空気が薄れていってしまうのではないかと、それを寂しく感じてしまうのは、日本から来たよそモノのエゴでしょうか。(渡邊淳子)



街中のダイソー



ブランドショップ



空港へ向かうバスの停留所